

---

# 地獄への招待状

ズラえもん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地獄への招待状

### 【Nコード】

N4778H

### 【作者名】

ズラえもん

### 【あらすじ】

資産家で名だたる寺門兼光の死をきっかけに、企業を引き継いだ娘咲子さきこのもとに突然現れた謎の男。莫大な財産のすべてを引き継いだ咲子と、相続を放棄し家を出た妹の咲夢さゆみ。謎の男に近づく咲夢の目的とは？そして、予期しなかった咲子の死の真相は？今ここに復習と欲と色が絡み合う！

(プロローグ)

「わたくし、こう言うものです！」

高村健造 たかむらけんぞう 34才は、資産家で名だたる寺門兼光てらかどかねみつの葬儀に列席し、兼光の長女である咲子さきこ 27才に名刺を差し出した。

「こんな席で失礼なのは重々承知いたしておりますが、なにぶんにもこれだけ大勢の列席者の方々がおられると、いつお話出来るかわからないと思ひまして。」

受け取った名刺の名に心当たりのない咲子は、高村に軽く頭を下げると丁寧な口調で言った。

「メディア流通の高村さん？」

若かりしころの吉永小百合を思わせる清楚な顔立ちで、軽く首をかき上げて見つめる咲子に、金持ちを鼻にかけ、意地の悪そうな女性を連想していた高村はホッと胸を撫で下ろした。

「はい！ 実は私、あなたのお父様と約束事がございまして、聞くところによれば、お父様の亡きあと、お嬢様のあなたが事業の方をお引き継ぎになるとか・・・？」

「はい。しかし引き継ぐとは言っても名ばかりで・・・私は事業の内容さえ把握出来ていないし、実質上は現在社長代理を勤めて下さっている香藤かとうさんに頼りきりになると思います！」

「そんなご謙遜を・・・しかしお嬢様の大変なお気持ちも痛いほどわかります。先日私が商談で伺った時には、お父様は年齢を感じさせないほどお元気でした。それがあまりにも急な出来事で、私もどうしたものかと・・・」

そう言つて高村は目を伏せた。

そんな高村を尻目に、咲子はひっきり無しにやって来る列席者達に頭を下げ続けていた。

百人を越える列席の客足が途切れたのを見計らい、咲子は高村に言った。

「すみません！ お待たせしてしまつて。とりあえず仕事上のお話でしたら、この場ではなんですので、後日お話を伺つと言つことです！」

高村は咲子の言葉に、ニツコリと人なつこい笑みを浮かべ、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。なにぶんにもお父様とは、大きな商談の真つ最中だったもので・・・では後日と言つことで、ご連絡お待ちしております。」

咲子に約束を取り付けた高村は、焼香台の前に立ち、花束で囲まれた兼光の写真に手を合わせた。

そのときの高村の口元に浮かぶ、意味ありげな含み笑いに気付いた者は、誰一人としていなかっただのである。

(商談)

後日咲子は自宅応接室で高村と会っていた。

咲子の隣には社長代理である香藤が座り、高村の話に熱心につなずいている。

香藤武彦<sup>かとうたけひこ</sup> 50才は、咲子の父親である先代社長の寺門兼光より、その手腕を認められ、若くして兼光の片腕となった、いわば寺門グループの司令塔と呼ぶに相応しい人物であった。

香藤は高村から手渡されたパンフレットを目で追いながら、低音の響く声で言った。

「高村さん！ 実はわたくし先代がお亡くなりになる前に、この件につきましてご相談を受けておりまして。」 と視線を上げる。

「それは話が早い！ では手付金などのお話のほうも・・・？」

「いいえ！ 社長のお考えは貴社メディア流通との専属契約を行い、あなたが当社の子会社と言う形で内部に事務所を構えると言う話でしたが、私は・・・いや、私を含む経営陣のほとんどが反対でして・・・ と申しますのも、今現在寺門コーポレーションは経営不振に直面してまして、業績がイマイチ伸び悩んでおるしだいで・・・それに、“商い博士（あきないはかせ）” でしたか？ なにぶんにもこの手の経営管理のためのコンピューター用ソフトウェアは、すでに様々なものが出回ってますからねえ。」

そう言つて、目の奥で冷たい光を放ちながら高村を見つめる香藤に、高村は詰め寄るように身を乗り出した。

「そんな・・・それでは話が違いますよ！ 先ほどもお話したように、商い博士は今までのものとは比べ物にならないほど高機能でして、それに社長さんの方とわたくし共とはすでに契約が進んでおり、すでに商品も在庫済みなんですよ・・・！」

泣き出しそんな表情で、高村がそう言つたとき、黙つて話を聞いていた咲子が口を開いた。

「高村さん、ちょっと待つてください！ 今香藤さんが述べたとおり、わが社は少々伸び悩んでいます。ですが、我が寺門コーポレーションが倒産なんて事はありません！ これはお約束します。」

しかし現段階では、たとえ社長の考えとはいえ、いきなり専属契約というのは私も納得しかねます。ですが、すでに父との話しが進んでいた以上は、あなたに全ての損失を負わせるというわけにはいきませんから、まず高村さんとの本契約の前に、サンプルとして現在仕入れている1万ケースを、寺門グループの電気部門で販売し、消費者の反応を見るといのはいかがでしょう！それまであなたは通いで、各スタッフの指導を受け持ち、本契約はその後商品の売れ行き次第ということ・・・。」

「いやしかし・・・それだと仕入れ先の業者がとても今現在の単価では納得してくれません。あくまでも専属契約という条件で破格値を打ち出してくれているのですから。」

咲子は食い下がってくる高村に、契約書突き返し、隣の香藤に言った。

「香藤さん！ 私の考えは今言った通りです。この先はあなたの判断にお任せします。」

咲子は椅子から立ち上がり、初対面の時から想像もつかない、まるで感情を覆い隠したかのような冷たい表情で高村を見下ろし言った。

「高村さん！ 父兼光が亡くなったと言うことは、その時点で契約そのものも白紙に戻ったも同然ですよ。莫大な損失を免れただけでも儲けものでしょ！」

それだけ言うと、咲子は香藤を残し部屋を出ていったのである。

「そう言う事ですので、高村さん！ お嬢さんのお考えが変わらぬうちに、仮契約だけでも済ませておきませんか？ お嬢さんはあ見えて、先代社長と同じく頑固者です。あなたの立場もわかりますが、ここは折れたほうが得策かと思えますよ！」

「……」

こうして高村は、思いもよらぬ咲子の態度に圧倒され、渋々ながらも承諾してしまったのだった。

（咲夢）

寺門家の玄関を出ると、広大な日本庭園を横切るように、これまた巨大な白壁造りの門に向かって敷石が伸びている。

重い足取りで歩んでいた高村は、庭の中央辺りに立ち止ると、寺門家を睨み付けるように振り返った！

“あの小娘め、俺をなめやがって！ 今に見ている・・・こうなりや何としてでも寺門グループの懐に転がり込み、いつかかならずお前を後悔させてやる・・・”

高村は口元を歪め、憎々しげに呟いた。

” ペッ” と唾を吐き門をくぐると、門扉にもたれ掛かり携帯をいじくる、いかにも今時の娘といった風貌の、20代前半とみられる女が立っているのが目にとまった！

女は高村に気付き顔を上げると言った。

「あんたさあ・・・姉貴との商談で来たんだろ？」

高村は驚いたように足を止め

「えっ！ 姉貴？ と言う事は、貴女は寺門家の？」

と、女のつま先から頭のとっぺんまで舐めるように見た。

「そうだよ！ 咲子の妹の咲夢はなむ。もっとも、あっちはあたいを妹とは思ってないかも知らないけどね！」

咲夢は胸元の大きく開いたブラウスに、デニムのミニスカートといった出で立ちで化粧も濃く、高村の目には決して良家のお嬢様という印象は得られなかった。

「これはこれは、咲子お嬢様に妹さんがいらしたんですか、それは存じませんでした。」

そう言つて咲夢の顔をまじまじと見つめる高村の頭を、一瞬曖昧な記憶が通り過ぎていったのである。

”あれっ！ 気のせいかな？ この女、どこかで会つた気がするが・・・”

と、高村が首をかしげたとき、咲夢がやや不満そうな表情に、うつすらと笑みを浮かべながら言った。

「だめねえ、大企業寺門コーポレーションの懐にもぐりこもつて言うのに、あたいのことを知らないなんて。」

高村は咲夢のことを思い出そうと記憶をたどつたが、まったく出てこない。

“まるで思い出せない！ やはり気のせいだな。 まあ・・・この手の女はどこにでもいるからな・・・どうせ何処かの飲み屋の女とイメージが重なつてるんだろう！”

高村は一瞬の動揺を気付かれないように、ニツコリと微笑んだ。

「いえいえ、そんなもぐりこむだなんて滅相も無い。 お父様はお嬢様たちのことは何一つ話してくれませんでしたから・・・それよりも、妹さんがこんなところで何をされてたんです？ もしかして、どなたかと待ち合わせですか？」

高村が冗談まじりに冷やかすかのように訪ねると、咲夢は携帯をパ

チンと閉じ

「うん。 まあそんなところかな。」

そう言っつてスカートのポケットに携帯を無造作に突っ込んだ。

「でしたら邪魔者はさっさと消えなければ。」

言い残し、高村が持っていた鞆を抱え直し、車に向かって歩き始めた・・・そのときだった！！

予期していなかった言葉が、咲夢の口から発せられたのである。

「あたいが待つてたのはあんだだよ、高村さん！！」

「えっ！！」

高村は門の脇にある広い駐車場に止めてあった、白いカローラの車の前でピタリと立ち止まると、近づいてくる咲夢を振り返った。

咲夢は高村の車に寄りかかるように身体を預けると

「あんださあ、親父の所に何度も来てたよねえ？ あたいいつも見てたんだ。 そしたらさあ、何でかわかんないんだけど、なんかだんだんあんだの事が気になり始めて・・・！！」

そう言っつて柄にもなく顔を赤らめ視線をそらす咲夢に、これまで口先だけで世の中を渡ってきた高村は驚いた素振りさえ見せず、ニッコリと白い歯を見せて笑った。

「ほう！ それは光栄ですな。あなたのように美しく、しかも寺門財閥のお嬢様からそんな言葉が聞けるとは夢にも思いませんでした！」

もともとプレーボーイで、女から言い寄られることに慣れっこになっている高村は、車の後部座席に持っていた鞆を放り込むと、咲夢の前に歩み寄った。

咲夢が言った。

「あたいさあ、こう見えても結構もてんのよね！ だから自分からコクるなんて初めて・・・あんなんで、特にいい男とは思わないのになんで興味が湧くんだろ？」

ぶっきらぼうな言い方ながらも、恥ずかしいそうにうつむく咲夢を見て、高村は心の中で呟いた。

“こりゃ運が向いてきたぜ！ この女を利用して、あの咲子って小生意気な女に一泡ふかしてやる”

「とにかくここで立ち話というわけには行かないし、何処かその辺りでお茶でも？」

そう言って助手席のドアを開き、咲夢に優しく微笑みかける高村の脳裏には、野望という名のシナリオがはっきりと描かれていた！

・つづく・・・

・・・

高村が咲子との仮契約を取り付けてから、一ヶ月が過ぎようとしていた……。

咲子への見本商品の引き渡しは3日後となり、高村は古いアパートの自室のベッドで横になっていた。

タバコをくわえ、天井を見つめていた高村が、隣でバスローブ一枚という姿で横たわる、咲夢の顔を覗き込みながら言った。

「お前……ほんとにこれでよかったのか？」

なぜかベッドでも化粧をしたままの咲夢は、そつと目を開き、何事もなかったかのように高村のくわえていた煙草を奪い取ると、慣れた手つきで胸一杯に吸い込んだ。

「あなたこそよかったの？ あんたはあたいと関係を持つことで、寺門グループの一員になるうって魂胆だったんじゃないかって、あたいは思ってるんだけど……でもさあ、前に話した通り、寺門の全財産は親父の遺言で姉貴の咲子が握ってるのよ。そもそもあたいは寺門家に興味はないし、おまけに姉貴とは馬が合わないから家を出てるのよ！ だから、あたいの取り分は放棄したってわけ！ あたいのやることにいちいち干渉しないって条件でね！ だから飯にあんたとあたいが一緒になっても、あんたの所には何一つ入って来ないわよ。」

高村は口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべると、さも関心無さそうに言った。

「なに言ってるんだ！ 馬鹿馬鹿しい・・・ 商売は商売、お前は前だろう。 だいいち俺はそこまでワルじゅねえし、それにもし寺門グループに取り入るつもりなら、寺門家でのけ者にされてるお前じゃあ役不足つてもんだらう。 そんな考えを持つてるなら、俺はお前じゃなく、姉貴の咲子に近づいてるよ！」

「ふうん、なるほどね・・・それも一理あるわ！！ まあ、あんたが何を企んでるにしろ、あたいにや関係ないけどね。」

咲夢もまた、興味無さげに答えると、枕元の灰皿に煙草を押し付け、鏡の前に座りなおすと、独特ともいえる濃い化粧を直しはじめた。

そのしぐさをジッと眺めていた高村が、ベッドに身を起こし言った。

「どうでもいいけどお前・・・なんで寝るときまで化粧してるんだ？ もしかして整形とかしてたりして・・・？」

高村の冗談とも本気ともつかぬ言葉に、鏡の中の咲夢が芝居じみた笑い声をあげた。

「はははっ！ あたいが整形？ さあそれはどうかしら。 とにかくあたいはねえ、誰にも素顔は見せないって決めてるの！ もちろんあんたも同じ。 もしあんたがあたいの旦那になったら、あんただけに見せてあげる。 あたいの全てをね！」

そう言っつて鏡を見つめる咲夢の目は、心なしか悲しげに見えた。

(本契約)

寺門コーポレーションの接客室で、高村は現社長である寺門咲子と会っていた。

咲子は、出庫伝票の束を指先で弾きながら、高村の前に腰をおろした。

「あなたの持ってきた “ 商い博士 ” 思ってたよりも評判いいわよ  
」！  
」

「ありがとうございます。あのソフトの管理機能は、寺門コーポレーションのような大企業にはうってつけでして・・・あらゆる商品の在庫管理や、入庫出庫から金銭の出入りまで、一目でわかり・・・」

” トントン “ 「失礼します。」

興奮気味に説明を続ける、高村の言葉を遮るようにドアがノックされ、秘書の香藤重幸<sup>かとうしげゆき</sup>29才が、ティーポットを片手に入ってきた。

重幸は現副社長（前社長代理）である香藤武彦の1人息子であり、兼ねてから社長である咲子との恋仲が噂されている。

堀が深く、キリツと締まったその顔立ちは、女性スタッフからも人氣で、時には咲子をやきもきさせることも有るとか無いとか・・・

そんな噂を耳にするたび、父武彦は無関心を装ってはいるものの、内心は息子と咲子との結婚を望んでいた。

重幸は慣れた手つきでカップに紅茶を注ぐと、高村に差し出した。

「どうぞー！」

「これは申し訳ない・・・」

恐縮した様子で頭を下げる高村に、咲子が隣に腰を下ろした重幸に、チラリと目線を送りながら言った。

「でもね、高村さん！ 商い博士の素晴らしさは、あなたではなく、こちらの彼が証明してくれましたのよ。」

「そうでしたか。ありがとうございます。」

「重幸さんはねえ、商品の説明販売を一手に引き受けてくれただけでなく、寺門グループのすべてのデータを、商い博士を使って管理が出来るようにして、各スタッフに教え込んでくれましたのよ。」

その結果作業時間が短縮できただけでなく、業績のほうも確実に上がってます！ 今日来ていただいたのは、重幸さんが商い博士の太鼓判を押した上で、あなたとの本契約を勧めるもんだから、それで重幸さんの言葉を信じ、少しでも早く正式な手続きを済ませておこうと思ったからなんですのよ。」

咲子はそこで一度言葉を切り、重幸に抱きつくようなそぶりで身体を摺り寄せると、高村にさげすむような視線を送りながら続けて言った！

「これであなたのメディア流通も一流会社の仲間入りね！ おほほほほっ！ 高村さん！ せいぜい重幸さんに感謝することね。」

重幸にべたべたと寄り添いながら、高飛車な態度で紅茶を啜る咲子に、高村は心の中で呟いた。

”くそっ……さかりのついたメス豚め！　なにが重幸だ！　会社が上向きになったのは俺のおかげだろうが……　フン！　まあいいさ。　契約書さえ取り交わせばお前なんかには無い、そうやってふんぞりかえってられるのも今のうちだぜ！”

顔を引きつらせながらも作り笑いを浮かべ、深々と頭を下げる高村の目には、社長室の高級ソファに寄りかかり、ワインを揺らす、未来の自分自身の姿が映し出されていたのであった。

こうして、商い博士は爆発的な人気を呼び、二百人を越える従業員を抱える寺門コーポレーションと、高村が一人で立ち上げたメディア流通との正式契約が交わされた。

高村は、故兼光との約束どおり、社内の一角にオフィスを構え、まるで寺門グループの一員であるかのように、頻繁に出入りを繰り返すようになり、寺門コーポレーションの従業員だけにとどまらず、上層部の面々とも杯を酌み交わすほど打ち解けあい、大きな信頼を得ることとなり、今や寺門コーポレーションにとって、なくてはならない存在となっていたのである！

高村は会社のために身を粉にして働いた。　ゆくゆくは自分のものになるのだからと自身に言い聞かせながら……

(秘めた野心)

そして週末、高村がアパートに戻ったのは午後9時をまわっていた。月極め駐車場に車を止め、アパートを見ると、自分の部屋の窓に灯りが見える。

高村が思い出したようにポツリと呟いた。

”そうか・・・今日は土曜日で朝から咲夢が来てたんだ・・・!”

毎週土曜日の朝には、咲夢がやって来ては掃除を済ませ、夕食を共にするのが、高村の生活の1つとなっていたのである。

部屋のドアを開けると、ベッドに横になり、週刊誌をめくる咲夢がいた。

「あつ！ お帰り・・・おそかったね。」

高村は咲夢の足元に鞆を放り出すと、右手でネクタイを緩めながら言った。

「ああ、今日はあの我がまま社長が朝から機嫌が悪くって、そのおかげで段取りが台無しになっちまってな。 君は？」

「あたい？ あたいはあんたが出掛けたあと、ベッドに入ったらそのまんま眠っちゃった。」

「ケツ！ 姉妹そろって気楽なもんだな！」

そう言つて、ワイシャツのまま咲夢の隣に身を投げ出した高村は、ハッツと大きなため息をつき、仰向けのまま目を閉じた。

それを見た咲夢が、慌てて言つた。

「こらこら・・・ワイシャツがしわになるじゃん！」

ワイシャツを脱がそうと手を伸ばしたとき、投げ出された左腕を見た咲夢は、高村のいつも使っていたカフスボタンが無いのに気が付いた！

ワイシャツの袖口を掴み、咲夢が言つた。

「あら！ あんたあたいのあげたカフスボタンは？」

「えっ・・・」

高村が咲夢に言われワイシャツの袖口を確認すると、左のカフスボタンが無くなっている。

「あれっ・・・おかしいな！ いつのまに・・・」

「ちよつとく、せつかくあたいがプレゼントしたのに！」

「すまない！ 明日オフィスの周りを探してみるよ。もしかしたら誰か拾ってくれてるかも知れないし。それより飯にしよう。」

咲夢は思い出したようにポンと手をたたき

「そつか・・・待ちくたびれて腹が減ってるのさえ忘れてた！ 今準備するよ。」

そう言つて週刊誌を投げ出すと、台所へと向かったのであった。

高村と咲夢は、ちいさなテーブルを挟み、咲夢の手作りのシチューを口に運びながら、5本目のビールを空けた。

お腹の落ち着いた高村が、咲夢の顔を見つめながら、呟くように言つた。

「そつだ！ 今日会社のほうに警察が来てたみたいだよ。」

「警察が？ 何しに・・・？」

「いや・・・俺は直接話してないからよく知らないけど、香藤副社長の話では、君の親父さんの兼光の死に、不審な点があるんだとか！」

「不審な点で・・・父の主治医は間違いなく死因は心臓発作だって・・・！」

「ああ・・・俺が思うに、警察は咲子を疑ってるんじゃないかなあ。何しろ、数十億っていう遺産を独り占めしてるわけだし。」

「馬鹿馬鹿しい・・・もういいわよそんな話、それよりビールもう一本開ける？」

「ああ、そうだな。」

ビールをほとんど口にしない咲夢とは正反対に、高村のグラスは見る見るうちに空になり、しばらくして酔いが回ると、ゆらゆらと身体を揺らしながら咲夢のほうへ身を乗り出した。

「咲夢！ 俺のおかげで寺門の業績は一気に伸びた。 だけどな、この俺はただの会社幹部では満足しない。」

咲夢は新しいビールの栓を抜きながら、ニヤリと笑い、意味ありげに熱い視線を向けた。

「ふん！ そんなことわかってるわ。 あんたは寺門のすべてを乗っ取るうって思ってたんでしょ？ だとしたら、咲子が警察に目をつけられてたら、それこそ都合じゃん！」

「ん・・・うゝむ・・・どうやらお前は、本当にあっち寄りの人間じゃなさそうだな。」

そう言って座った目で見つめる高村を、咲夢はビールを注ぎながらにらみつけた。

「だからあたいは最初から言ったじゃん・・・寺門の家には興味が無いって！ もしかして、あんたあたいを疑ってたの？」

「いや・・・そうじゃない！ 用心してただけだ。 よし！ それなら俺の計画を聞かせてやる。」

そう言って高村はノートパソコンの電源を入れた。

咲夢が興味しんしんといった様子で覗き込む中、高村が器用にマウスを操ると、モニター画面には“高い博士”のトップ画面が表示され、その後、わけのわからない数字の羅列が表れたのである。

「これこそが俺の持ち込んだ経営管理ソフトの隠し機能だ。今はこいつなくして寺門グループのすべての関連会社が稼働しない！咲夢！もしこいつに外部からアクセスできるとしたら、お前ならどうする？」

「外部からアクセスって・・・“高い博士”は完璧なセキュリティも売りのひとつだったんじゃない？」

「そうだ。どんなハッカーもこいつのセキュリティは敗れない・・・だが俺は別だ！こいつには俺しか知らないアクセスコードが組み込まれているんだ！」

「あんた・・・もしかして、そこから進入してコンピューターウイルスでも植えつけようって言うの？」

咲夢の言葉に、高村はニヤリと笑い、残りのビールを飲み干した。

「だとしたら？」

咲夢が驚いたように、高村の顔を覗き込んだ。

「ちょっと待ってよう！それじゃ管理責任者同然の、あんたの首も危ないじゃん。」

「そのとおり。そんなことになれば、俺は間違いなくお払い箱だ。だが、それと同時に俺を引き込んだ社長・・・つまりお前の姉の

咲子も失脚する。」

「うん、それはまあ当然よね。」

表情一つ変えることなく、さらりと saying のける咲夢に、高村は続けて言った。

「そこでお前の出番だ!」

そう言つて咲夢を見つめる高村の目は、あやしい輝きを放っていた。

「えっ!」 あたい! あたいに何をしろつて言うの?」

咲夢が、驚いたように眉を寄せ高村を見つめた。

「咲夢! お前は兼光の遺言を覚えているか?」

「そりゃ覚えているさ・・・今も弁護士の手元に保管されてるよ。」

「うん。兼光の遺言では自分の亡き後、寺門の全財産は、咲子とお前とで配分されていたはずだ。だが寺門家のやり方に反発するお前は、財産分与を放棄し家を出た・・・!」

「そのとおりだよ。あたいはがんじがらめの寺門家より自由を選んだのさ!」

「そうだったな。だが、遺言状の文章をもう一度よく思い出してみろ。」

【我が亡き後の遺産相続権を、長女咲子と次女咲夢の2人に与える。

ただし2人の娘のうちどちらかが必ず、寺門グループの運営に携わることと条件とし、万が一2人とも拒絶、もしくは何らかの理由で運営が困難になった場合、寺門コーポレーションはただちに解散し、資産のすべては国の基金へ贈与することとする。」

「大まかだが、大体こんな文面だったはずだ。」

「そうそう・・・実際はもっと長かったと思うけど・・・まあ大体そっこだよ！ けど・・・遺言状がどうだろうと、あたいはあんな家も会社も継ぐ気なんかないからね！」

投げつけるような言葉とともに、咲夢は立ち上がり台所へと姿を隠した。

高村がふらつきながら後を追う。

「わかってる・・・お前はきつとそう言うと思っていた。 だけど考えてみる、咲子が社長の座から転落したら、莫大な遺産のすべてが赤の他人の手に渡るんだぞ！ それでもいいのか？それに、もしこのまま俺とお前が一緒になっても、俺は一生咲子にこき使われるんだぞ！ お前は名前を貸してくれるだけでいいんだ。 お前が寺門を受け継ぎ、会社は副社長の名目で俺が取り仕切る！ そうなれば、お前はさらに自由を手にすることが出来るんだ。 好きなときに好きなところへ行き、うまいものをたらふく食べる・・・お前は一生遊んで暮らせるんだぞ！」

咲夢は唇をかみ締め、黙ってうつむいたままにも答えようとはしない。

高村は続けた。

「咲夢！ 俺はお前を愛してるんだ！ たのむ。 俺を・・・俺を  
一国一城の王にしてくれ！」

そう言っつて高村は咲夢の肩を、後ろから優しく抱き寄せたのであつた。

・  
・

・・・つづく・・・

寺門コーポレーションの業績は、うなぎのぼりに上昇し、高村の計画も架橋に向かっていた。

そんなある日のこと・・・

社長室の前を通りかかった高村の姿を見つけ、咲子が部屋の中から声をかけた。

「高村さん！ 私は5日ほど留守をしますから。」

「留守？ はっ・・・はい！ どちらへお出かけで？」

高村は仕事と割り切り、相変わらず虫の好かない咲子に、精一杯の愛想笑いをして見せた。

「伊豆のホテルで会合があるの。そのついでに、父の残してくれた別荘で、しばらくのんびりしてこようと思って！」

「そうですか・・・まあ、社長はお父さんがお亡くなりになってから、事業の引継ぎや何やらで、お忙しかっただでしょうからねえ。ここらでゆつくりされるのもよろしいかと・・・なんでしたら、私のほうで運転手を手配いたしましょうか？」

「いいの！ 自分であれを運転して行くわ。」

そう言って咲子は、社長室から見えるガレージに止めてある数台の車の中から、お気に入り赤いムスタングを指差した。

“フン、ムスタングか！ 世間知らずの小娘の癖に、何台も車を持ちやがって、生意気な！”

高村が心の中でつぶやいたとき、咲子が持っていた車のキーを投げてよこした！

「出発は午後からよ。 今、家政婦の敦子さんが準備をしてきているから、あなたはその荷物を車に積み込んでおいてね。」

「かしこまりました！」

そう言つて高村が頭を下げると、部屋のドアは勢いよく閉められた。

“くそーっ・・・俺はお前の召使じゃないぞ！”

渡された車のキーを憎憎しげに握り締め、思わずつぶやいた高村であつた。

そして5日後・・・

会社から与えられたオフィス代わりの一室で、遅い昼食をとる高村のもとに、副社長の香藤武彦が血相を変え飛び込んで来た！

「高村さん！ 大変です・・・お・・・お嬢様が・・・」

香藤のあまりもの慌てぶりに、高村は頬張っていた里芋の煮付けをお茶で流し込むと、急いで椅子から立ち上がった。

「咲子社長が？ 社長がいつたいどうしたんですか？」

「そつ．．それが、たった今警察から知らせがありまして、お嬢様が．．お嬢様が伊豆の別荘からお帰りの際、運転を誤って車ごと谷底へ．．．」

「なつ．．なんだって？ そつ．．それで咲子社長は？」

「それが全身を激しく強打して即死だそうです！！」

「そんな！ 何かの間違いじゃ．．．」

「とにかく、わたくしはこれから警察のほうに行つて、詳しい話を聞いてきます！」

頭を抱え、ブツブツとつぶやきながら、部屋を出る香藤の背中を、高村はその眼に怪しい光を放ちながら、ただ黙って見つめていたのだった。

数時間後．．．

蜂の巣をつついたような騒ぎの中、警察との話を終えた香藤が、高村の部屋のドアをたたいた。

待ちかねていたようにドアが開き、香藤は進められるままに腰をおろした。

「香藤さん！ 詳しい事故原因はわかりましたか？」

「ええ・・・それがすなあ・・・どうも警察は他殺ではないかと言っんです!」

そう言った香藤は、動揺のためかキョロキョロと落ち着きが無く視線が定まらない。

高村は驚きの表情で眉をひそめた。

「えっ!・・・他殺? 咲子社長が誰かに殺されたと言っんですか?」

「いえ・・・そんな・・・まさか・・・いやしかし・・・!!」

もごもごと口ごもる香藤に、苛立った高村は椅子から立ち上がった。

「香藤さん! しっかりしてください。あなたは副社長なんですから。」

「ああ・・・面目ない・・・気が動転してしまつて・・・! 高村さん! 驚かないで聞いてください。警察の調べで、咲子さんの車のハンドルに、細工がされていたことが判明したのです。」

「まさかそんな・・・それは、確かなんですか? 警察の思い過ごしという可能性も・・・?」

「いいえ、警察が言うのには、ハンドルシャフトという部分・・・つまり、ハンドルとタイヤとを連結する金属棒のことらしんですが、それを固定する部分のネジがはずされており、シャフト本体にも、金鋸のようなもので切れ込みが入れられていた痕跡が見られる、とのことでした。」

「そんな・・・いったい誰が・・・」

「さあ・・・警察でも聞かれましたが、私にも皆目見当がつきません！ ですが警察の話では、車内に犯人とももの思われるなにかが残されていたらしく、すでに持ち主の割り出しにかかっているとでした。」

「なにか？」

「ええ、その何かについては証拠隠滅の恐れがあるとかで、具体的には言ってくれませんでした。犯人が残したものである確率はきわめて高いとか・・・」

“うゝむ・・・”

テーブルを挟み向かい合った2人は、ただただうなり声を上げるばかりであった。

### 新社長誕生

咲子が何者かの手により殺害され10日が過ぎたころ・・・

寺門グループでは緊急会議が開かれ、咲子の妹咲夢を新社長にとの高村の意見を、副社長である香藤武彦はもとより、職を失いたくない経営陣のほとんどが賛同した！

高村は自身の野望のもとに、渋る咲夢を口説きつづけ、咲夢もまた、

必要に食い下がる高村と香藤に根負けをした形で、いやいやながらも社長就任を引き受けることとなったのである。

その後、話ほとんどん拍子に進み、咲夢の新社長としての挨拶が、社屋の大会議室で執り行われ、それに伴い、新人事も決まり、副社長ならびに、役職として迎え入れる者達の名が書かれた貼り紙が貼られ、選ばれた役員達は、互いを称えあい、喜びあっていた。

そんな様子を、壇上から満足げに見下ろしていた咲夢が、マイクに向かい言った。

「え〜・・・と言うことで、寺門コーポレーションは株式会社Jimon（ジモン）と名を変え、新たな出発をする事となりました。これまでのスタッフに加え、新たなスタッフの皆さん！力を合わせ共に頑張ってまいりますよう。」

会場に大きな拍手が沸き起こるなか、少し遅れて、白いスーツに身を包んだ高村がやって来た。

高村は壇上から降りてくる咲夢に近づき、握手を求めるように右手を差し出し、小声で言った。

「咲夢！よくやった。なかなか様になってたぞ。これで俺も一国の王だ！」

しかし、にやけた表情で興奮気味に言う高村に対し、咲夢は無表情のまま冷たい視線を投げ掛けると、差し出された右手を払いのけたのだった。

「あら！ なんのことかしら？」

咲夢の予期せぬ言葉に高村は凍りついたようにその動きを止め、思わず息を飲んだ。

「なっ・・・なんだと？」

大きくその目をひんむき驚く高村に、咲夢は口元をゆがめ “フン！” と鼻で笑った。

「まっ・・・まさか・・・お前！」

高村はくるりと向きを変えると、貼り出された役員名簿の前に走り寄った。

「あっ！ これは・・・」

高村は一瞬自分の目を疑った！

本来なら副社長の欄に書かれているはずの、高村の名がどこにも見当たらないのだ。

「ちっ・・・ちくしょう！！ あのアマ俺を裏切りやがったな！」

高村は、張り紙の張られた壁に、自らの拳をたたきつけると、ギリギリと齒軋りの音を響かせながら、社長室へと向う・・・廊下の床をドンドンと踏み鳴らし、高村が怒りの形相で社長室のドアを開くと、そこには咲夢の姿はどこにも見当たらず、代わりにまだ幼さの残る少女のような面持ちの女が、細身のタバコを燻らしながらソファ

ーに座っていたのであった。

「うっ・・・君は・・・君はだれなんだ？ 咲夢はどこへ行った？」

高村が怒鳴るような口調で言ったときだった。

“ あっははははっ！！ ”

キョロキョロと部屋の中を見回す高村のうしろで、女が突然甲高い声で笑い出したのである。

驚いた高村が女を見ると、女はピタリと笑うのをやめ、鋭い目付きでソファーから立ち上がると、ゆっくりとした動きで高村のほうに近づいてくる。

高村は何故か女のその様子に、理由のわからない恐怖感をおぼえた。

女が言った。

「高村さん、この私かわからないの？」

女の声聞いた高村は思わず驚きの声を上げた。

「ハッ！ その声は・・・咲夢？」

トレードマークになっていた濃い化粧を落としているため、まるで別人のような印象を与えるが、女の正体は紛れも無く咲夢であった。

「あつははははっ！！　あなたはこの顔に見覚えがあるはずよ高村さん・・・いいえ、詐欺集団のリーダー高杉　健（たかすぎけん）さん。」

「なつ・・・咲夢・・・お前なぜそれを・・・！」

ジリジリと近づいてくる咲夢の顔を見つめていた高村の脳裏に、突然12年前の記憶が蘇った！

「あつ・・・おまえはもしかや刈谷工業の・・・」

「ウフフツッ！　やっと思い出したようね。　そう。　私は12年前あなたに殺された刈谷伸介（かりやしんすけ）の娘よ！」

そう言つて咲夢が鬼のような形相でにらみつけると、高杉は“チツ！”と舌打ちとともに、開き直つたように体制を立て直し、不敵な笑みを浮かべた！

「フン！！　殺されただと？　馬鹿を言つな！　奴が勝手に死を選んだんだ。」

「そうね・・・あなたが率いる詐欺集団に会社を倒産に追い込まれてね！　父さんはあなたに・・・あなたに殺されたのよ！！」

「ケツッ！　そんなこと知つたことか。　騙されるやつが間抜けなんだよ。」

吐き捨てるように言う高杉を、咲夢はさらさらみつけた。

そんな咲夢を負けじとにらみ返ししながら、高杉がふてぶてしい態度で言った。

「それでお前は、俺に仕返しするために近づいたってわけか・・・」

「そうよ！　あんたのせいで、父娘2人暮らしたかった私は一人ぼっちになってしまった・・・子供ながらに後を追って死のうかとも考えた。でも、出来なかった・・・。それを不憫に思ったのか、当時親会社だった寺門グループの創立者、寺門兼光が、まだ小学生だった私を引き取り幼女として育ててくれたのよ。でも、寺門家は私にとって肩身の狭い場所ではなかった・・・毎日のように咲子にいびられ、足蹴にされた。だけど、私には他に行くところなんかありやしない！　寂しさと、悔しさと、痛みに耐えながら、日々を送っていたある日、あんたを寺門の家で見かけるようになったのよ！　その瞬間私の心に復讐心が湧きあがってきた・・・その日から私は濃い化粧をし、言葉遣いも乱暴なものに変え、別人になることであんたに近づき、悪事を暴くためその動きを追ったの！」

「そのために身体まで投げ出したってのか・・・チキシヨウ！　俺としたことが・・・なぜあの時お前の正体に気が付かなかったんだろうなあ。　ケッ！　俺もヤキが回ったもんだぜ！」

高杉がそう嘯いたとき、奥の部屋のドアが開き二人の男が姿を現した。

その音に驚いて、振り返った高杉に、ドアから出てきた恰幅のいい初老の男が、ポケットから取り出した手帳を突き出しながら言った。

「湊川署の本多だ！ 高杉健。 お前を詐欺の常習と、寺門兼光および寺門咲子殺害容疑で逮捕する！」

一瞬何が起きたのかわからないといった様子でたたずんでいた高杉が、突然大声を上げた。

「さっ・・・殺害容疑だと・・・！！ ふざけるな！ 俺は誰も殺してなどいない。」

そばにいた若い刑事が、慌てる高杉の後ろに回りこみ、出口をふさぐと、高杉に向かって言った。

「我々警察は、そこにいる寺門咲夢さんから、一通の手紙を預かっている。 そこにはまぎれも無く、寺門兼光氏の文字でこう書かれていた。」

【咲夢へ 私は今、高村建造と言う男にひつこく付きまとわれている。 奴は商談だと称し、我が寺門グループの懐に入り込み乗っ取りを計画しているのだ。 私にはわかる・・・なぜならば、私は奴の顔に見覚えがあるからだ。 私の記憶に間違いが無ければ、奴はおそらく、お前の親父を死に追いやった詐欺グループのボス“高杉健”だ！ それだけではない、高杉は冷酷非道な男だ、金のためなら私の命をも狙う・・・いや、もうすでに殺害計画を立てているはずだ！ 咲夢！ もしこの先、私に万が一のことがあったなら、この手紙を持ち、警察に高杉の正体を伝えてほしい！】

手紙にはそのほかにも、高杉の関わったと思われる数点の詐欺事件の名が書かれていた！

手紙の内容を聞かされた高杉が、大きく目をひん剥き、咲夢を指差

すと大声で怒鳴った。

「うそだ〜っ!! その手紙はこの女が・・・この女が仕組んだで  
つちあげだ!!」

取り乱す高杉に、本多刑事が顔色一つ変えず近づくと

「残念だがね、手紙は筆跡鑑定の結果、兼光のものに間違いないと  
の報告が入っている。」

「うそだ〜・・・うそだ〜・・・俺は誰も殺していない。 信じて  
くれ刑事さん!」

じたばたとすがり付く高杉の、目の前にあつたテーブルに、若い刑  
事が持っていたナイロン袋から数点の品物を取り出し並べると、中  
から茶色い小瓶をつまみ上げ言った。

「高杉! こいつに見覚えがあるだろう?」

「・・・・・・・・」

「これは、兼光が常用していた心臓病の薬だ。 お前は兼光に近づ  
き、隙を見て偽物とすり替えた・・・だが、兼光の心臓はお前が思  
っていたより弱っていたため、お前が寺門コーポレーションに潜り  
込む前に発作を起こした! あせったお前は計画を変更し、娘咲子  
に近づき、殺すチャンスをつかがっていたんだ!!」

「知らない・・・俺はそんなもの見たことも無い。」

「ほーう・・・! ではなぜ兼光の部屋から発見されたのが偽物で、

本物のこいつがお前の部屋にあったんだ？」

「俺の部屋に……？」

若い刑事が品物を持ち替えた。

「これだけじゃない！ この鋸刃は事故をおこした咲夢の車のハンドルシャフトとの傷と一致したぞ。こいつもまたお前の部屋で発見されたものだ。」

「そんな……そんな馬鹿な！ 俺は、俺は本当に知らないんだ！」

「では、これはどうかな。」

そう言って、若い刑事が次に摘み上げたのは、高杉が以前なくしたカフスボタンであった。

「これはお前のものに間違いないな？」

「ああ、それは俺が咲夢にもらったものだが……気が付いたらなくなっていた！」

「なくなっていた？ ふん！ お前が車のハンドルに細工をした際、車の中でなくしたんだろう！」

「車の中？ そんなところになぜ？」

若い刑事はドンと大きな音を立てテーブルをたたくと、高杉の胸倉を掴み、怒鳴り声を上げた。

「とぼけるのもいいかげんにしろ！！ 咲子が伊豆に出かける日の午前11時ごろ、お前がこそそと車に近づく姿を、社長室の窓から秘書の香藤重幸氏が目撃しているんだぞ。」

「そつ・・・それは社長に荷物を積み込むよう言われて・・・」

「うゝむ！ 確かにそれも事実だろう。 だがな高杉。 トランクに荷物を積むだけだったのなら、なぜ運転席にこいつが落ちてるんだ？ それと、仮にお前以外のものが事前に細工をしようにも、咲子が当日数台ある車の中から、赤いムスタングを使うと誰にわかる？ おまけに、咲子の車はすべてセキュリティ装置が取り付けであり、鍵も特別にあつらえたものだそうだ！ すなわち咲子からキーを預かったお前しか、赤いムスタングに細工を施すことは出来ないんだよ！ しかも、目撃者の重幸氏の証言では、お前は周りから身を隠すように、こそそと辺りをうかがっていたそうじゃないか。 荷物を乗せるだけなら、なにもこそそすることは無いだろう？」

「ちがう・・・こそそなんてしちゃあいねえよ！ 俺は本当に荷物を積み込んでただけなんだ！ 信じてくれ・・・これは・・・これは畏だ！ 俺を陥れる畏なんだあゝ！」

今にも泣き出しそうな表情で叫びながら、じりじりと後ずさりをする高杉の腕を、2人の刑事が両側からつかむと、初老の本多刑事が手錠をかけながら言った。

「高杉！ 言い訳は署で聞かせてもらおう！」

ガツクリと肩を落とす高杉の姿を、湧き上がってくる勝利の笑いを

かみ殺しながら、黙って見守る咲夢の目には、まるで獲物を狙う蛇の目のような、冷たく冷酷な光が宿っていた。

．．．じ

く．．．

深夜2時・・・香藤重幸は、伊豆の山中の別荘でガウンを羽織り、コウコウと燃える暖炉の火を見つめながら、ソファーにもたれ、優雅にワインを揺らしていた。

窓の外ではちらちらと雪が舞い、あたりの静けさをいっそう引き立てている・・・

そこに、静寂を引き裂くようにドアが開き、コートを羽織った女が入ってきた。

「おまたせ。」

「おそかったな！ ずいぶん待ったよ。」

「いろいろと支度到手間取って・・・」

言いながら女は、暖炉脇のコートかけに脱いだコートをかけると、熱い視線を投げかけてくる重幸の隣に腰を下ろした。

女は咲夢であつた！！

「俺はこの日が来るのを待っていたんだ！ こうして君と会える日を・・・」

太ももに手を滑らせ、その顔を耳元に近づけてくる重幸を、咲夢は両手でそっと遠ざけた。

「ちよつとまつて！ まだ着いたばかりよ・・・私にも少しワインを頂戴。」

「ああ・・・悪かった。」

慌ててその手を引つ込めた重幸は、自分の飲んでいたワイングラスを咲夢に手渡した。

「乾杯といきたいところだが、あいにくグラスがひとつしかないんだ。」

「わかってるわ！」

咲夢が受け取り、一口二口とワインをのどに流し込む・・・その横顔を見つめながら重幸が言った。

「こうして君が、俺の手の届くところにいるなんて、まるで夢のようだ！」

「うふふふっ！ 夢じゃないわよ、これからはずっとあなたの隣にいるわ。」

妖艶な笑みを浮かべ、身体を密着させてくる咲夢の肩を抱きながら、重幸が心から喜びを感じていた。

そのときだった。

「あらっ！」

重幸の肩にもたれかかっていた咲夢が、重幸のガウンのポケットか

らのぞく白い封筒に気付いたのである。

「重幸さん……これは……？」

「あっ……そうだ！ ココに着いたとき、玄関の下駄箱の上に置かれていたんだ。宛名も差出人の名前も無いから、とにかくこの別荘の今の持ち主である君に渡そうと思って、すっかり忘れていたよ。」

「へえ……なんだろう？」

手に取り、裏表を確認したが、重幸の言葉通り、そこには何も書かれていなかった。

「まあいいわ。」

咲夢はそう言うとソファから立ち上がり、かけてあったコートのポケットに無造作にねじ込むと、再び重幸の隣に腰を下ろした。

「読まないのかい？」

「うふふ……中身が何であれ、今の私たちには必要ないでしょう？」

「うん！ そうだね……それにしても君は恐ろしい女だな。」

「ふふふ……でもその女に惚れたのはどなたかしら？」

「チエツ……それを言われちゃ、こっちは何も言えないな！ しかし、計画があんなにうまく行くとはねえ。」

感心したように言う重幸に、咲夢は何も答えず ヒョイツと肩をすくめて見せた。

それを見て、重幸が思い出したように言った。

「そうだ！ ひとつ聞こうと思ってただけど、警察に渡した兼光の手紙！ まさか兼光自身があんなこと書くはずないし、いったいあれはどうやったんだ？」

咲夢は、いたずらっぽくニヤリと笑い、グラスのワインを飲み干した。

「うふふふ・・・聞かせてあげるわ！」

そう言うと、つつかえていた何かが外れたかのように、一気に話し始めたのだった。

「私が寺門家に引き取られ2年が過ぎた頃、兼光は心臓病を患うと同時に、手足の震えを引き起こして、文字が書けなくなったのよ。

　　だけど兼光は人に弱みを見せるのを嫌い、私に兼光に代わり、すべての書類にサインをするように命じたの。でも、それだと簡単に見破られてしまう。そこで左利きの私は、右手で文字の練習を重ね、書類だけでなく文字という文字はすべて私が代わりに書いた。もちろん例の遺言書もね！ そのことは誰も知らない・・・もちろん咲子も・・・！ だから私の右手は兼光の右手・・・というわけよ。」

「なるほど、それで筆跡鑑定では兼光のものとされたのか・・・じやあ薬をすり替え兼光を殺したのも・・・？」

「そう言う事！」

当然のように答え、空のワイングラスを差し出す咲夢に、重幸がワインを注ぎながら言った。

「だけど・・・君は恩があるはずの兼光をなぜ？」

その言葉に、咲夢の目が鋭く変わるのを、重幸は見逃さなかった。

「恩？ 誰があんな奴に！ 私も真実を知るまでは兼光を本当の父親のように慕っていた・・・でも、あいつは・・・あいつは私の父さんを殺したのよ・・・兼光は父さんの刈谷工業がほしかった！ だから、学生時代から札付きのワルだった高杉を使い、父を言葉巧みに罠にはめ、莫大な借金をさせたの。借入先はもちろん当時親会社だった寺門コーポレーション！ 二十歳そこそこの、年端も行かない男に騙されたと知った父は、悔し涙を流しながらながら谷底へ身を投げたわ。今夜のように、粉雪の舞い散る夜だった・・・」

咲夢は窓の外をにらみ、2杯目のワインを飲み干すと、キュツと唇を噛みしめた。

「へんだなあ・・・俺は、親父から先代社長は、刈谷工業を救うために手を貸そうとしていたって聞いてたんだけど！」

「フン！ 所詮、あなたの親父さんは、兼光の裏の顔を知らないのよ！ そもそも、寺門コーポレーションが、ココまで大きくなれたこと自体が、裏社会とつながりがあった証拠って言えるんじゃない？」

「なるほど・・・そうかもしれないな・・・それで咲子も・・・」

「咲子・・・あいつは人間じゃない！ 人間の皮を被った悪魔よ！」

そう言つて咲夢が、空になったワイングラスを、テーブルに戻そうと手を伸ばした、その時である・・・ “ガチアーン” グラスを持っていた手が滑り、白木の床に落ちたグラスが大きな音と共に砕け散つたのだった。

「あつ！ やつちやつた。」

「おい気をつけろよ！ 怪我は無かつたかい？」

「うん！ 大丈夫・・・でもグラスはこれしか持つてきてなかつたのよねえ。」

「ああ・・・まあいいさ。 ちょうどワインも底をついたことだし。」

そう言いながら、割れたグラスを片付けようと、立ち上がりかた重幸に咲夢が言つた。

「だめ！ 危ないわ、そのままにしておきましょう。」

「いや・・・でも・・・！！ そうか・・・そうだな！！ こんなめでたい日に怪我でもしたら、せつかくの夜が台無しだ。」

そう言つて、ソファーに座り直した重幸に顔を近づけ、耳元で咲夢が言つた。

「ちょっと待っててね。」

咲夢は重幸の頬に、軽く自分の唇を押し当てると、一人駐車場へと向かい、しばらくすると、新しいワインボトルを片手に戻って来た！ もう片方の手には紙コップが握られている。

咲夢は、再び重幸の隣に腰を下ろし、ニッコリ笑うと言った。

「こんなこともあろうかと用意してたのよ！ グラスは予想外だったから紙コップしかないけど、ワインは最上級のドンベリよ！」

「はははっ！ まいったよ君には。」

「さあどうぞ召し上がれ、未来の “だ・ん・な・さ・まつ！”」

咲夢がそう言ってワインを注ぐと、重幸は満足げな表情で口元へと運んだ。

「これはうまい！ 今夜は最高の夜になりそうだな。」

「そうね。でも芝居とはいえ、あなたが咲子と恋人気取りでいちやつく様は、さすがに見えていて気が気じゃなかったわよ。」

「バカ言つなよ！ 俺は、咲子のような傲慢な女はタイプじゃない。君の頼みじゃなきゃ、あいつが腕を組んで来ただけで、ぶん殴ってたかもしれないぜ！」

そう言って重幸は2杯目のワインを注いだ。

「君は飲まないのかい？」

「うん・・・私はいいわ、なんだかこれ以上飲んだら寝ちゃいそう  
で・・・」

「そうかい、そりやまずい。」

「ウフフツツ！ 今夜のワインは格別でしょ！ それもみんなあな  
たが、うまく立ち回ってくれたおかげ・・・」

「ああ・・・しかし、咲子の車に細工をしたときはさすがに手が震  
えたよ！」

「それを言うなら私だって、高杉のカフスポタンを気付かれなくて  
手に入れるのは、結構大変だったのよ。 高杉の部屋に薬ビンと鋸  
刃を見つからないように隠すのもね！」

咲夢の言葉に黙ってうなずきながら、重幸は2杯目のワインを飲み  
干し、3杯目を注いだ・・・かなり酔いが回ったのか、その身体は  
ゆらゆらと左右にゆれ始めている。

その様子を咲夢が横目でチラチラとうかがいながら言った。

「あなた、見かけによらずお酒に強いのねえ。 私が来るまでに、  
もうすでに1本空けてるんでしょ？」

「ん・・・ああ、酒なら誰にも負けないよ。 だけど・・・」

そこまで言った重幸の顔から突然笑みが消えた！

「だけど・・・このまま本当に警察は、気付かずに来てくれるだろ

うか？ 時間がたつに連れ、なんかだんだん怖くなってきたよ。」  
酔いとともに不安になったのか、重幸が真顔でつぶやくと、咲夢は口元を歪め、“フン”と鼻で笑った。

「バカねえ・・・考えてみてよ。私は莫大な遺産を放棄して家を出たのよ。会社に戻ったのだって、あなたの親父さんや役員たちの要望で、“嫌々”寺門を継いだって事になってるわけだし・・・金目当てが見え見えだった咲子ならまだしも、そんな私を警察が疑うかしら？」

「そうか・・・そうだよな！ 俺たちは、誰にも・・・」

そこまで言ったときだった、重幸は自らの身体の異変に気付き、まるで実験動物でも観察するかのような視線を向ける咲夢を“ハッ”と振り返った。

「お・・・おまえまさか・・・」

”ゲツ・・・ゲホツ・・・” 重幸は突然激しく咳き込んだ！！

胸がやけるように熱い。

言葉を詰まらせ、大きく目を見開き、咲夢のほうに怯えたような視線を向ける重幸のその顔は、わなわなと唇を震わせながら徐々に苦悶の表情へと変わっていく。

その様子を、咲夢は立ち上がり、ニヤリと不適な笑みを浮かべると、獲物を狙う蛇のような冷たい目つきで見下ろしていた。

「うっ……うっうっ……さっ……さゆみ……お前何を……」

咲夢が見つめる中、重幸はうなり声とともに喉をかきむしり、ガタと小刻みに全身を震わせ、苦しそうに立ち上がったが、時すでにおそし……。重幸の手から、紙コップが音も無くすべり落ちると、その身体はそのまま前のめりに倒れこみ動かなくなったのである！

そのとたん、咲夢の口からは甲高い笑い声が漏れた。

「アツハツハツハ！！　だから言ったでしょう！　今夜のワインは格別だって……。私の素顔（正体）を知った者は生きてちゃいけないのよ！！」

咲夢は倒れた重幸に歩み寄ると、わき腹を蹴り飛ばした。

「毒入りワインのお味はいかがでしたか？」

「……」

重幸は、白目をむいたまま、口からよだれを流し、ピクリとも動かない！

咲夢は倒れた重幸を引きずり、暖炉の前に放り出すと、すべての紙コップを燃え盛る暖炉へと放り込んだ！

「これで何一つ証拠は残らないわ！　さようなら……。一晩限りの“だ・ん・な・さ・まっ！”」

咲夢がそう言って、重幸の着ていたガウンの裾を、暖炉の中に投げ込めると、ガウンに燃え移った炎は、あっという間にその身体を包みめらめらと音をたて火柱をあげたのである。

その様子を横目で眺めながら、咲夢は掛けてあったコートを羽織り、毒入りワインのボトルを片手に別荘をあとにしたのであった。

．．．．．つづく．．．．．

ちらつく粉雪の中を、咲夢の乗る車が山を下っていく……

やがて車が、道路わきに設けられた、谷間の広いスペースにたどり着くと、咲夢はサイドブレーキをかけ、ルームミラーを覗き込んだ。

そこには、上空高く舞い上がる火の粉とともに、炎に包まれる別荘の姿が映し出されている！！

ミラーの中で、音も無く燃え盛る炎を、唇をかみ締めながら食い入るように見つめていた咲夢だったが、やがて思い出したように、コートポケットから白い封筒を取り出した。

ルームランプの薄明かりの中、封を切ると、中からは数枚の便箋が現れた……それは、咲子が亡くなる数時間前に、咲夢に宛てて書いたものであった！

“フン、咲子の奴いつの間にかこんなもの……”

心でつぶやき、手紙へと視線を移した咲夢は、そこで驚愕の事実を知ることになる！

【咲夢へ……まず最初に、これまで私があなたに対して、辛く当たって来たことついて、謝らせて下さい。本当にごめんなさい！私はあなたが嫌いだったわけではなく、ただ、あなたがうらやま

しかつたのです。

父と2人で暮らしていた私には、母の記憶がほとんどありません！  
そんな私を父はとても可愛がり、時間が許す限り、いつも一緒にいてくれたのです。でも、あなたが幼女として寺門家に入ってきたからは違いました！ 実の娘がそばにいなから、父の愛情が他人のあなたに向けられはじめたのです。私の心に、嫉妬心がむくむくと沸き上がってくるのがわかりました。そして、それまで私1人が独占していた父の愛情が、赤の他人のはずの、あなたに向けられた事に、私の “なぜ？ どうして？” という思いが、しだいに、あなたに対する憎しみへと形を変えていったのです。しかし、父が亡くなったあとの会社運営について、弁護士に相談に行つたときでした。 私は弁護士から驚くべき事実を聞かされました！！

その事実とは、私とあなたが実の “姉妹” であると言うことです…… あなたは、刈谷伸介の娘ではなく、真正正銘の、寺門兼光の娘だったのです！ その事実をあなたに知らせたく、私はこうしてペンをとりました。】

“ そんな……まさか…… ”

一枚目の手紙を読み終えた咲夢は、信じられないといった表情で咳き、高鳴り始めた鼓動を抑えながら、二枚目を読み進めた。

【当時父兼光には、籍の入っていない妻がいました。それが私たちの母であり、あなたが父親だと信じていた、刈谷伸介の妹でもあったのです！ 母は体が弱く、あなたを生むとすぐにこの世を去った……当然父兼光に子育てなど出来るはずも無く、私は当時住み込みだった、家政婦の敦子さんが面倒を見ることとなったのです。

しかし、生まれたばかりのあなたは、敦子さんではどうにもならず、母の兄であり、子供のいなかった、刈谷伸介夫婦に実子として

引き取られて行ったのだそうです。その後、刈谷氏は裸一貫で刈谷工業を設立し、その脅威ともいえる業績で瞬く間に一流企業にのし上がり、寺門グループのライバル会社として、業界にその名をとどろかせました。しかし、時を同じくして、不幸にも妻をなくすことに……。それからと言うもの、刈谷氏には転落の人生が待ち構えていたのです！働く意欲をなくし、ギャンブルと酒におぼれる日々……。多額の負債を抱え、会社は倒産寸前にまで追いやられたのです！そのあまりにもひどい有様に、見かねた父が手を差し伸べました。父は、刈谷工業を寺門グループの一社とし、刈谷氏の負債を肩代わりしたのです。やがて、父の心が通じたのか、刈谷氏もなんとか目を覚まし、立ち直りかけた矢先のことでした。刈谷工業に目をつけた詐欺グループのリーダー高杉健が、刈谷氏を陥れたのです！刈谷氏個人の資産は無くても、バックに寺門グループのいる刈谷工業という看板は、チンピラたちにとっては、まだまだ価値のあるものだったので。高杉は刈谷氏に、ありもしない株の話を持ちかけました……。父への恩を一刻でも早く返したいと思っていた焦りからか、慎重さを失った刈谷氏は、高杉の巧みな言葉に、簡単に騙されてしまったのです。そして、あなたも知っているとおり、無念のあまり刈谷氏は、自らその命を絶ちました。世間では、成功者である父へのねたみ半分から、刈谷氏の自殺の原因を、刈谷工業を我が物にしようとした、父のせいだと噂するものも現れました！きっとその噂は、あなたの耳にも届いていることでしょう。でも決してそうではありません。父は間違ひなく刈谷氏を助けようとしていたんです！そして父は、一人ぼっちとなったあなたを引き取り、幼女として籍をいれました。こうして、あなたは本来自分が住むべき場所である寺門家へと戻ってきた。というわけなのです！】

手紙を持つ咲夢の手がワナワナと震えていた。咲夢は震える手で三枚目の手紙を開いた。

【驚くべき事実はそれだけではありません！ 父がこの世を去り、あなたが寺門家を出て行ったあと、私を訪ね高村と言う男が現れました。その高村の正体こそが、刈谷氏を死に追いやった詐欺グループのリーダー、高杉健なのです！ 高杉は現在、寺門コーポレーションの臨時スタッフとして、私のもとにいます。私は弁護士からあなたの出生の秘密を聞かされた後、あいつの正体に気付き、騙されたフリをして、あえて引き入れたのです！ このことは、他のスタッフたちはもちろん、香藤さん親子にも内緒にしています。私はその事実を、一刻も早くあなたに伝えようとしたのですが、あなたは私を避け、会ってはくれませんでした。そのとき私の脳裏に、あなたが月に一度はこの別荘を訪れ、一人の時間を過ごすのが好きだった、という事が思い出されました！

そこで私は、伊豆での会合のあと、ここに来て、この手紙を残しました。ここに置いておけば、きっとあなたが見つけてくれる……そう考えたのです。咲夢！ 私を許してください！ そしてあなたがこの手紙を読み、もし私を許してくれるなら、すぐに連絡して下さい！ そのときは二人で、悪の限りを尽くしてきた高杉を、地獄のそこに突き落としてやりましょう！ 2人で父の意思を受け継ぎ、ともに歩んでいきましょう！！

もしあなたが私をゆるしてくれるなら……

あなたの実の姉、寺門咲子より】

手紙を読み終えた咲夢は、まるで魂が抜き取られかのように、フラフラと車から降りると、溢れ出る涙を拭おうともせず、ゆっくりと空を見上げた。

チラホラと舞い落ちる粉雪が、咲夢の火照った頬に当たり、瞬く間に溶けて行く……

“ なんで・・・なんでこんなことに・・・ ”

心の中でつぶやいた咲夢は、持っていたワインボトルを谷底に向かってほうり投げると、そのまま崩れるように座り込み、真っ暗な谷底を見つめ大声で泣いた。

その手に、涙で濡れた手紙を、きつく握り締めたまま・・・

涙でぐっしょりと濡れた死者からの手紙・・・それは、実の父と姉を自らの手にかけて咲夢にとって、まさに、地獄への招待状に他ならなかったのである！

・・・終・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4778h/>

---

地獄への招待状

2010年11月4日01時40分発行